
Gundam Divine 外伝

ダビデ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Gundam Divine 外伝

【Zコード】

N1395D

【作者名】

ダビーテ

【あらすじ】

非人道的な実験で生まれ、混乱した状態のまま育った主人公アプ・フィルの物語。戦争の裏で起きた復讐と迷いの物語

第一話

その髪は血を浴びたかのように赤く、その顔は罪の無い子供のように純粋であった。その罪人の罪は「無実」そのものであった。

「こいつ、大丈夫か？」

牢屋の様な実験室で若い男が他の一人の老人研究員立ちに問い合わせる。彼の言うこいつはその実験室で体の自由を奪う服を着た赤毛の女性であった。しかし若い研究員が心配していたのは全身の傷ではなく、彼女が口から血を吐いている事と明らかに元気が無い事であった。

「心配するな、脈拍数は通常だ。薬の副作用でも出たのであるう。」

頭の上には毛をはやしていない、白髪が目立つ研究員が冷たく言った。するともう一人の老人が言った。

「やうだな今日はこのぐらいにしておくか・・・。ちゃんと世話しろよ、俺はここで失礼する」

彼も又髪を生やしていたが髪の毛も生えており、色はまだ茶色だった。彼がこれを言ったあとに一人の老人はその場を去った。そうすると若い研究員はタオルと近くの冷蔵庫から食べ物を取り出し、女性の近くまでより話し始める。

「大丈夫か？ほら、血はこれでふきな」

若さゆえか彼はやはり心配だった。差し出されたタオルを彼女は口でくわえて噛むとそれをすぐに落とした。その後彼女はただ彼を見つめた。

「睨まないでくれよ。君は完全じゃないんだ」

そう言うと彼はパンを裂いて彼女に一切れ渡した。少し戸惑った後、すぐに彼女は彼の手にあるパンを口で奪い取った。

「後少しの我慢さ。いずれこの部屋から出られる。服だつて着れるよ。いう事を聞けば戦争も終わってきっと自由になれるさ。」

それを聞いても彼女はまるで嬉しそうではなかつた。いづれ食事が終わると男は周りの機械を異常が無いか調べたりしてから電気を消して去つた。彼女は暗闇の中ただ一人ぼっちだつた。しかし特に寂しいなどとは感じなかつた。むしろ彼女にとって一人と言う事は自分に危害を加える人も自分に実験をする研究員も いないと言う事であり安心できた。しかし壁に鎖で繋がれている状態は座り込むのも難しく睡眠をとるのにはいつも苦労していた。

こんな日々が後一週間続いた後、若い男のいう通りになつた。彼女についていた鎖は外された。もちろん抵抗しようとは思つたがその力はもちろん無かつた。そしてその時から数日は彼女の記憶はあやふやだつた。ただ、気付いたときには軍服を身につけており、又あの男が目の前にいた。若い研究員であつた。

「おはよう、気分はどう? ほら、これ読んで」

そう言うと彼が差し出したのは何やらMSの操作説明書であつた。しかし彼女はそれが何なのか分からず後少しで口にくわえようとした所を彼に止められた。

「おいおい、何をするんだ? · · · あ、そうか、僕とした事が忘れてたよ。君は言葉が分からないんだつたね。どうしよう · · · 」
しかし、この時、彼女は予想外の事をする。

「ア · · · リガト」

彼はこれを聞いて思わず驚いた。彼女は既に言葉を覚え始めていたのだ。彼はとりあえず冷静に対応した。

「 · · · どういたしまして。そつか、いきなりMSの操作は覚えてもらえないな。まずは言葉の勉強だな。まいつたな」

この頃には彼女は今の状況を思い出し始めていた。彼女は今トレンジングルームのような所に居たのだ。ここ数日間はここで、弱りきつたからだを半強制的に鍛えられていたのだ。困り果てた若い研究員に白い髪の研究員が彼の後ろまで近寄り、肩に手を置くと彼に説明した。

「安心したまえよ。彼女の学習能力は普通の人間と比べ物にならな

い。飲み込みは早い。言葉なんてすぐに覚えるさ。」

衰えていた筋肉を元に戻すのにそれほど時間はかからなかつた。しかし、彼女に休む時間は余り与えられない。すぐさま彼女には言葉を学習してもらわなければならなかつた。

若い研究員の名前は健と言つた。名前に感じを持つ人間は珍しいがどうやらそれは彼の家系の人間が代々守つてきた伝統らしかつた。他の研究員と比べ、若いにもかかわらずこのチームの中にいたのは、彼がちよつとした天才であつたからであつた。彼は何と高度な生物学を専門し、18歳の若さで大学を卒業していた。しかし、その若さゆえの世間知らずと経験不足さで同じチームの研究員達に軽蔑されていた。そんな彼はよく老人の研究員達の考え方に入意見していた。健は彼女にどうやって言葉を教えるかでも老人達と違う意見を持った。

「彼女には必要最低限の知識しか与えない。私達のやり方の方が手っ取り早いし余計な知恵が付かなくて済む。」

「しかし、非人道的なやり方です！まるで人を機械のように扱つています！」

健は冷静な相手に対して常に情熱的に反論した。

「一ヶ月だけ下さい！私の方法の方が優れていると言う事を証明して見せます。」

目を輝かせながら喋る彼を見て研究員は冷静に答えた。

「・・・一週間くれてやる。だが一週間以内に証明できなければ、彼女には洗脳部屋に来てもう。」

洗脳部屋・・・それは帝国軍の非人道性を証明する物であつた。通常は反抗的な態度を持つものを使いやすくするために使われている物であつた。帝国軍のMSパイロットのほとんどはこの部屋を経験していた。老人研究員達の提案はこの部屋を利用して彼女に言葉を教える物であつた。

「・・・わかりました。」

それから彼は一週間彼女に言葉を教えた。その方法は本や会話を通

して、という方法だつた。学習能力が高いだけあって、彼女は飲み込むような速さで言葉を習得した。そして最後の日には会話が成立つほどであった。

健と教育の経験のある他の研究員と彼女は三人で施設の一つの部屋で会話の練習をしていた。しかし、そこに老研究員達が入ってきた。

「さあ、一週間たつた。どうなんだ？ちゃんと覚えたのか？」

彼らはこうは言つていてたが彼らが取る行動は既に決まつていた。

「結構覚えましたよ単語は既に150個ぐらい覚えたし、会話だつて……」

しかし彼の老研究員達の説得に彼女が横やりを入れる。

「健……この人達、恐い」

純粋な訴えではあつたが彼らの気に触るには十分すぎた。

「……恐くなんか無いさ、アプファイル。」

だが心の中では健は彼女に同意していた。老人達はついに本性を見せる。

「健君、どうやらこれ以上君に任せられるわけにはいかなかつた。彼女を拷問室に入れる、最初からこうするべきだつたのだ。」

彼らは無理矢理彼女を連れていった。アプファイルはただ健と一緒に居たいだけであった。恐怖とともに連れ去られ、彼女は健の名前を繰り返し叫んだ。

「待つて下さい！……ちゃんと言葉を覚えているではありますか！」

しかし彼の言葉も虚しく、彼らの耳には届かなかつた。自動ドアが音も立てずに閉まる。

「……そんな。」

第二話

人は間違いから学んでいく。ならば間違つてない人間からは、学ぶ事など無い。

アプファイルには、拷問室での記憶はなかつた。残つたのは結果だけであつた。彼女の頭の中で叩き込まれた言葉が次から次へと沸き上

がつてくる。連邦軍、モビルスーツ、戦争、憎しみ、正しい、正しい、撃つ、殺す、勝利、敗北、そして死。感情は残つていなかつた。彼女はその部屋に入る前の記憶を忘れていた。だが、長く忘れていたように感じる名前がふと浮き上がる。健。そして、彼女は彼に会いたいと思うようになつた。

「健さんは何処ですか？彼に会いたいのですが・・・」

彼女は横にいた老研究員に尋ねる。彼は他の研究員の顔色をうかがい、彼らがうなずくと、彼は彼女に教えた。

「彼なら、あなたが拷問室に入る前に居た部屋に、居るはずです。」
彼のその言葉の言い方から、何かを隠しているかのような様子が伺えたが、アプファイルにはそれが分からなかつた。

「ありがとうございます。」

しかし、彼女がその場所についた時、彼女にとつて理解を超えた出来事が既に起こつていた。彼女は言葉を学んだだけで意味が分からぬい物が多かつた、しかし、ここで彼女はある言葉の意味を知る。

死。

「健・・・？」

健は倒れていなかつた。壁によつかり地面に座つていた。彼の右肩には一つの穴があつた。そして彼の周り辺り一面には赤い物が飛び散つっていた。咲き乱れる花が如く。そして健は名前を呼ばれても動かなかつた。

アプファイルは彼にかけより、彼の表情を伺うように地面に座つた。彼の頭には肩と同じ穴が空いていた。拳銃による物だつたが無論アプファイルには分からなかつた。そして、彼女はついに理解し始めていた。死。あの部屋で学んだ言葉。知識ではなく勘のような物で理解したのだ。

そして、その理解は衝撃のようになに彼女を襲う。その理解は新たな疑問を生んだ。その疑問への答えが分からないと彼女には湧くようなストレスが溜まつた。そしてそれは解き放たれた。叫んだ事の無い叫びと、流した事の無い涙が防ぎきれずに溢れてきた。彼女はまだ

生まれて間も無いが、その短い間に見つけた、小さな希望の火が、わざわざ大量の水で消されたのだ。

アプファイルが疲れて、叫び止まるといつの間にか後ろにいた老研究員静かな声で言う。

「失敗作だな。彼女は・・・」

この言葉の意味をアプファイルは知つてはいたがこの時はどうする事も出来なかつた。彼女はまだ憎しみの意味を知らないのだから。

第三話

脳ある鷹は爪を隠す。脳ある鷹は憎しみを隠す。そして安心しきつた相手を引き裂く。

健の死から半年あまりがすぎた。アプファイルはこの六ヶ月で様々な事を学んだ。彼女は六ヶ月で通常の人間には2年はかかるMS操作の訓練を終わらせたのだ。言葉の学習といい、研究者達は彼女の驚愕的な学習能力に自ら驚いていた。彼女には様々なテストが行われ、全てにほとんど何の異常も見られなかつた、一つを除いて。精神鑑定。彼女にはどうやら精神に不安定な部分があるようであつた。そのせいか、健が死んでからと言うものの彼女はほとんど話をしなかつた。しかし研究員達にとつてはそれだけ扱いやすくなるだけで好都合であつた。

今日はついに初の本物のMS操作テストであつた。研究場の外にある軍事施設にあるMSデッキに向かつている途中での出来事であつた。見知らぬ研究員が通りすがりのドアを開けたとき彼女は中をほんの少しみた。しかし、中で何が行われているのかを理解するには十分であつた。

巨大なテストチューブのようなガラスに閉じ込められている人方の物体。瓶詰めの赤ん坊。彼女はついに自分の正体を理解した。そして彼女は待つていた、この時を。知る必要のある事柄を全て理解し、必要な物をすべて手に入れたなら、後は心のささやきに耳を傾けるだけ。

そして彼らはMSデッキにたどり着いた。

「あれだ、お前のMSは。バルキリーと言つ。」

そこにはほかのMSとは明らかに違つ「デザイント」のMSがあつた。赤と白の色で塗装され、比較的細く華麗なデザインから、高速接近戦闘用MSだと言う事は明らかであつた。実はこのMS、帝国軍が地球で手に入れた一部の「ガンダム」の設計図の設計思考を元に開発されており、リミッターがかけられてはいるものの、バルキリーは理論的に他の帝国軍製MSの一倍以上性能があるはずであつた。いわゆる「ガンダム」を作るための試作機であつた。

彼女は自分からバルキリーに乗つた。そして起動させた。通信から聞きなれた研究員の声がした。

「さあ、出撃させてくれ。模擬戦闘テストを行つ。」

しかし彼女はMSを動かさなかつた。アプローチはMSのスペックと武器を確認していた。

大型ビームブレイドが二つ。ビームブレイドの充電にも使うさやの形をしたビームキャノンが二つ。それだけのシンプルなデザインだつた。

「どうした?なぜいう事を聞かない」

すると彼女は突然、周りにあつたMSを破壊し始めた。ビームブレイドの威力はすさまじく、少なくとも周りにあつた物は一機のこらず破壊されてしまった。

「おい!なにをやつている!やめろ!」

しかし、聞く耳を持たない彼女は出撃し、遠距離から研究員達がいる司令室にねらいを定める。

「今までありがとう。でも、あなたたちの言いなりになるつもりは毛頭無いの・・・。残念だけど、消えてもらつしかないわ。」

「ま、また一分かつた、私達が悪かつた、だから命だけは!」

アプローチは少し考えてみたが、彼女の考えは変わらなかつた。

「駄目、やつぱり生かしておけないわ。」

バルキリーからはビームキャノンが放たれ、司令室とその周辺に見事な穴が空いた。出撃準備のされているMSが居ない事と、突然の

襲撃に何もできずにクローン技術開発所はほとんど破壊された挙げ句、アプファイルを逃してしまった。

だがアプファイルには当てはなかつた。彼女は自分の人生の目的を果たしたのだからそれでよかつたと思つたし、後悔はないようであつた。やがてバルキリーのMSもエネルギーが切れ、彼女は宇宙空間を、酸素も数日しか持たないような鉄の棺桶ですごす事をしいられた。しかし、この時、彼女の想像を絶する事が起きた。

彼女の機体、バルキリーは引っ張られていたのだ。エネルギーが切れ、スラスターを使い切つていた影響で一定方向に機体は止まらず進み続けていたが、その進む方向が変わつていたのだ。バルキリーのカメラにはある丸く青い物が映つていた。彼女が見た事の無い物であつた。

地球。人間の故郷であつた。

近づくにつれそれは次第に大きくなり、引っ張る力も強くなつていった。ついに画面いっぱいに地球が映ると機械類が異常の報告を始めた。

「どういう事！？この惑星は何なの？」

機体は完全にコントロール不能になつていていた。地球の大気圏に突入するをゆつくりと、だが確実に機体の温度が上昇し始めた。優れたMSだつたバルキリーはそれに見合わせる冷却装置が備わつており、冷却装置の作動により温度の上昇は中和され始めた。

しかし、それにも眼界があつたのか温度は溜まらず上昇していく。そしてついに地上が見え始めた。だが彼女が始めてみた地上は森でも砂漠でも、地面ですらなかつた。

機体は真つ直ぐ海へと向かつていった。重力の影響により超高速で移動している上に機体の表面は既に金属が溶ける温度に近づいていた。そして海との衝突により機体の温度も速度もかなり落ちたがそのまま海底に激突した。そして彼女は衝撃と高熱で気絶をした。

彼女が目を覚ました頃には大変な自体になつていていた。酸素も残り少ない上に溶けた表面から空気が漏れ、水がMSの中に入つてきていた。

たのだ。だがMSはまだ辛うじて動く状態だった。アプファイルは何かバルキリーを起こすと何とか地上に出ようと海底の坂を登り始めた。しかしカメラを上に向けても水面は見当たらない上に酸素は後15分持つかどうかであった。のんびりしている暇はなかつた。宇宙戦闘用に作られたMSは水の中と言つ状態に対しては有効であつたが歩く動作が苦手であった。にもかかわらずアプファイルはバルキリーに走るような動作をさせて水面に出ようとした。高い操縦性でアプファイルは倒れずに操作し続ける。

しかし、15分では到底地上に出られるはずも無かつた。残りに2分の所でやつと水面の近くまで来たが地上に出るためのはまはなかつた。それどころか、下り坂になつて行った。ここでアプファイルは賭けに出る。その山で一番高い所に立ちバルキリーをジャンプさせた。そしてバルキリーの脚部にある力で行ける最大の高さまで行くと彼女は一か罰かコクピットから出る。パイロットスーツはなかつたがコクピットが完全に開く前にアプファイルは大きなひと息をとつた。そして不器用な泳ぎ方で水面に何とか出る。バルキリーはゆっくり海底の闇へと消えていった。そして幸運にもアプファイルの前に大陸の姿があつた。まだ遠かつたが泳げる距離ではあつた。

数分後何とかアプファイルは地上に上がる。だがもう体はびくとも動かなかつた。そのはまで倒れていた彼女だが、徐々に空の星々が姿を見せはじめていた。アプファイルは自分の体を少し起こすと美しい夕焼けを見た。周りの光景全てが彼女には新しく、美しかつた。だが彼女は本当に孤独になつてしまつた。浜のすぐ近くには森があつたが、周りには生き物の気配そのものが無かつた。

ヒト
人間の故郷でアプファイルはしばらく過ごすこととなつた。彼女にただ一つ足りない本能を頼りにして・・・

第四話

輝く太陽が希望と勇気ならば、光る月は絶望と悪意の誘惑であろう。闇が広がる空には太陽に似た小さな星があるように、絶望する人は、たとえ偽りのものであつても、希望を探す。それは星を眺めるよ

うに空しく、悲しく、力強い。

地球上に落ちてからいくつもの日々が過ぎた。アプファイルは落ちた当初、体調が優れず、食べ物をろくにとることができなかつた。何が食物であり何がそうでないのかが分からないと言う事もあるが、それ以前に慣れない環境への変化に彼女の体がついていけなかつたのだ。今では知識も付き、リンゴやサクランボなどといった果実や食べられる野菜などを主に食べていた。しかし、なれるまでにかかつた時間のせいで彼女はかなりやせていた。

そんなある日、彼女は遠くで爆発のような音と光を目撃する。ほかに誰もいないはずのこの地球で、山火事のような炎ならともかく、爆発が起きるのは不自然きわまりないと思つたアプファイルは急いで爆発の方角に向かう。爆発は小一時間ぐらいで止まつたが彼女は方角を見失わずに三日かけてそこに向かつた。その途中で彼女は思いがけないものを見つける。

緑と紫の塗装が施され、雰囲気は違うもののバルキリーと似た頭部をしているMSであつた。通常バックパックがついてるはずの背中から煙が出ており腰から下は川に沈んでいた。地上に出ている上半身には戦闘後のような細かい傷やビーム兵器などからの焦げ目がついていた。あたりにはほかに何も見えなかつた。まだ使い物になるかもしれないと思つたアプファイルはコクピットを開けるべく、胸部に乗りコクピットハッチを探す。しかし、入り口はどこにも見当たらずもしかしたら別な位置にあるのではないかと思つて頭部に上ろうとしたその時、コクピットが開いた。

しかし、そこにはまだ生きている人間がいた。気を失つていたためアプファイルは彼をなんとかコクピットから引きずり出し地上に降ろした。気を失つていてる彼をどうすればいいかわからなかつたがとりあえず川の水をくみ、彼の顔にぶつかけてみたが、変化はなかつた。念のために息をしているか確認すると息はしているし、心臓ももちろん動いていた。仕方がないのでアプファイルはMSに乗り込んでみる。

MSはまだ動いていた。アプファイルが唯一乗つたことのある帝国性のMSであるバルキリーと似た仕組みであつたため操作しようとすると、Warningの文字とともに被害の報告が画面に現れた。MSの名前は「エウリュアレガンダム」で、左足が破壊されており歩行不可能である上に背中についていたメインスラスターが大破しており使い物にならず空を飛ぶこともかなわなかつた。

MSのエネルギーもほとんど使われており、残り少なかつたが、まだビームライフルもビームマクロウも使えた。また、頭部バルカンもまだ使用可能であることが分かつた。しかし今のアプファイルにとつて武器であるそれらは使えたとしても意味がなかつた。

その日から数日間、大雨が降り、その影響で川が増水しエウリュアレのほとんどが水に入っている状態になつてしまつた。その上、そのエウリュアレのパイロットは未だ意識不明だつた。しかし、彼のパイロットスーツには地球の模様がついたロゴがついており、スースのデザインそのものがアプファイルの使用していたものとだいぶ違うことから彼女は彼が帝国軍の兵士ではないと判断した。そのためアプファイルは彼を保護し目が覚めるまでできる限りの看護をした。もちろんそんな経験の彼女は彼のためにあまり何もできなかつた訳だが、彼はまだ生きていた。

アプファイルが彼を見つけてから三日間過ぎたその夜であつた。彼はついに目を覚ました。目を覚まし、起き上がりながら頭を抱えた。「痛つてー。いつたい何が起きたんだ？」

そういうながら彼は辺りを見回した。見覚えのない風景と人に彼は驚いたが、のんきな態度は変わらなかつた。

「いつたいどれくらい気を失つてたんだ俺は？全くこんな頭痛は生まれて初めてだぜ」

しかし、アプファイルも至つて冷静であつた。頭の中ではあれがやつと目を覚ましたこと確かに喜んではいたが、それを決して表情に出さなかつた。

「どのくらい気を失つていたかなんて私には分からないわ。それよ

りあなたは何者なの？あのモビルスーツは何？」

しかし、男はすぐに答えず頭を抱えて嫌がるよな声を出してから間を置いて答えた。

「質問は一つずつにしてくれ。俺はスワン・デビッドっていうものだ、あのモビルスーツがなんのかは正体不明あなたに安々、教える訳には行かないぜ。あんたこそ誰なんだ？」

この問いにアプファイルは戸惑いを見せた。名前しか分からない相手に自分のことを話していいのかどうか分からぬと言う事もあつたが、それよりも彼女は自分が何者なのかをよく分かつていなかつたということの方が大きかつた。

「私は、アプファイルっていうの。なんていつたらいいのか分からなければ、分かりやすくていいえば帝国軍からの脱走者ね。私はあのモビルスーツに似たものに乗つてここにきたの。」

「曖昧な答えだな。好きじゃない。・・・だが助けてくれたのは確かだし、俺も帝国軍から逃げてきたものだからな。分かつた、信用して教えてやろう。」

デビッドは少し間を置き近くの木を背もたれにして地面に座り込んだ。ゆっくり話し始めた。

「あのモビルスーツは昔、この星で作られたモビルスーツに似せて作った物だ。二つとない試作型だが、今じゃあのまま、使い物にならない。似た物に乗つたといったな？それは多分ガンダムを再開発するために作った試作だろ。いや、それを改良した物かな、再開発の試作品で帝国軍が所有していた物は一つしかなかつたはずだからな。そのMSはなんという名前だった？」

「バルキリーという物だつたわ。今は海の底だけどね。あなたが乗つていたMSはエウリュアレガンダムといったわね。でもバルキリーはガンダムではなかつたわ。」

「それもそのはずだ。帝国軍はガンダムの設計図を一度も手に入れてないのだからな。帝国軍に偽物の設計図を送つたんだ俺は。俺とこの地球で反帝国軍の革命を起こした人たちがな、ガンダムの設計

図を見たときに帝国軍に渡してはならないと思つたと同時に、それを帝国軍への反撃のチャンスとみたんだ。だが、まさかこんなことにならうとはな・・・

これをいい終えた後デビッドはアプロファイルから田線をそらし数日前に爆発が起きていた方向に田をやつた。

「連邦軍はどうしたの？彼らは助けにこなかつたの？」

「ああ、来たさ。連邦軍も帝国軍をつぶす一度とないかもしないチャンを逃したくなかったからな。だが遅かったのさ。無事に脱出していればいいのだがな。」

この話をしている間もデビッドは決してその方角から田を離さなかつた。

「あんたには悪いが、雨がやんたら俺はあいつらの基地に向かう。そうだ、あんた名前はなんていうんだ？」

「私はアプロファイルというの。分かっているわ、あなたにはまだ希望があるのね。」

この言葉にデビッドは眉毛を片方あげた。

「アプロファイル・・・リンク？面白い名前だな。アプロファイルには希望はないのか？」

しかしアプロファイルは答えなかつた。彼女はただ田線をそらしていた。その質問に答えるつもりはなかつた。

「そうか・・・まあいいさ、雨はまだ少し降つてゐるが、俺はもう行かせ。生きていたらその時は恩を返すぜ。それと、あまり思い詰めるんじゃないぜ。じゃあな。」

そう言つてデビッドは森の中に消えていつた。アプロファイルには何となく、彼が約束を果たすまで生きているとは思えなかつた。だが消え行く彼はアプロファイルにない物があつた。アプロファイルはそれを少しらやましく思い、彼がせめて田線を果たせなくとも、生き残れるよつにと、思つた。

このとき、彼女は感じたことのない感情を感じる。寂しさに似るその感情は孤独感であつた。

ずっと探していたのかもしない。すがる何かを。見落としていたのかもしない。もつと大切な何かを。逃してしまったのかもしない。人としての自分を。

デビットがいつてからかなり長い時間が経っていた。

あの人はどうなったのだろうか・・・。数日前にみた宇宙に打ち上げられていた宇宙船たちはいったいどんな意味があつたのだろうか。死んでいなければいいが。

そんなことを考えながらアプファイルは赤い果実にかぶりつく。地球上に落ちてから肉は口にしていなかつた。経験を通して野菜、茸、そして果実など、食べられる物と食べられない物を覚えたがやはり何か足りない感じがしていた。長い間人間がいなかつた地球は食物であつた。生きることに問題があつた訳ではなかつたが、彼女は帝国軍の基地に人が残つてているかどうか確かめにいった。しかし、彼女は細心の注意を払つていった。彼女は泥や植物の根っこなどを使って体に植物や木の枝などをつけ、保護色のメイクをしていた。

基地は物静かだつた。人間どころか、ほかの生き物が近くにいる気配すらしなかつた。だが彼女は警戒を怠らなかつた。地面をはうようにしゃがみゆつくりと森から出てきた。相変わらず人の気配はなかつた。彼女はゆつくりと一番近くにある倉庫に向かつた。

倉庫の門はがら空きにされており中をみることができた。倉庫はMSを保管するための物らしくはしごや階段がたくさんあつた。しかし、肝心のMSは一つもなかつた。逆に言えば倉庫ははしごと階段以外はほぼ完全にからであつた。そのままアプファイルは基地の施設をすべて調べた。MS、戦艦などはもちろん、資料や食物など、ほとんど残つていなかつた。

そしてアプファイルはある研究施設を見つける。そこについた物の数々は見覚えのある物であった。テストチューブで育つ、人の形をする人ならざるもの。無論、彼らを一つも見かけることはできなかつ

たが、施設の故意的な破壊があつた。死体はないが地面についている血は黒く変色して固まつていた。アプファイルの顔色は何一つ変わらなかつた。だが彼女の内側は様々な感情であふれて、はちきれそつた。その施設は彼女の誕生の理由を物語つていた。彼らは悪魔のような実験を地球でも行つていた。そう、神になろうとする彼らは悪魔そのものであつたのかもしれない。

どうしようもない怒りを感じていた彼女は近くの机の上にある一冊のノートに気づく。なぜそこにおいてあるのか？忘れ物なのか？いらなくなつた物だったのか？それを知る方法はもちろんない。だがアプファイルは中をのぞかずにはいられなかつた。ノートに近づくと彼女はそのノートの上に手紙のような封筒が一緒に置いてることに気づく。中をあけて読んでもみるとそこにはこう書かれてあつた。

”これを誰かが読んでいるということはつまり、帝国軍が敗北し、連邦軍が我らの研究に興味を持つていているということだ。それはつまり、その研究の指導をしていた私の死を意味する訳だが、この際、そんなことはどうでもいい。大切なのは研究の完成である。人類は進化をするのだ。次に進む力を持つていて。私はこれをこのノートに記す。そして我が息子アダムよ、まだ生きているのなら見せてやるがいい。お前が持つ可能性と力を。私にはもはやお前しかいない。”

手紙はそこで終わつていた。そこには筆者の名前などはいつさいなかつた。だがアプファイルには誰が書いた物なのかはだいたい検討がついていた。自分を作つたくそ野郎どものうちで殺しそこねたのは限られているからだ。

アプファイルはファイルをあける。そこにはアプファイルの理解を超えた研究による発見や、実験の結果などが記されていた。遺伝子の仕組みの解説、ほかの生き物から遺伝子をとることではなく、遺伝子そのものを作り替えることで意のままの人間を作ることができると書かれており、その方法まで記されていた。それをみるアプファイルは意外にも冷静であつた。そして後方のページまで進むと実験の結

果が記されていた。

”第一の実験、人の形にはほど遠い形で成長が進み、一週間もたたないうちに死滅。第一の実験、成長を早めるために施しをした事があだになり、肉体が退化した状態のまま成長、一ヶ月以内に心臓の筋肉が体の成長についていけず、死亡。”

その後にも延々とかかれていた。そして、第二十六の実験の報告に最初には結果の写真があった。そこにはアプファイルの写真があった。そこにこうかかれてあつた。

”第十六の実験の結果は成功と言えた。初の人が作った人間が完成了。遺伝子操作の副作用により髪の毛は赤く、精神状態に異常がみれるが、学習能力や身体能力は予想以上に高いと言える。だが精神状態の異常により第一研究施設の暴走事件を起こし、新型MSバルキリーを奪つて逃走。彼女の育成に関わった研究員によりアプファイルと命名される。”

さらに次の実験結果にはこうかかれていた。

”第十七の実験の結果は成功だつた。外見的に異常は全くなく、アプファイルを上回る学習能力と身体能力を見せる。精神状態の異常はあるが、前回の失敗を繰り返さないように精神安定剤を使用する事で暴走を防いだ。MSにのせても暴走しなかつた。さらに初の実践テストでは見事敵のMSを4機も撃破する。そのまま、第十六前線部隊に所属させたところ、驚異的な戦果をあげる。しかし、精神の異常は悪化し、様々な症状が彼の所属していた戦艦の艦長から報告があつた。その艦長は彼をアダムと命名していた。”

さらにはそこにはアダムの写真があつた。長く黒い紙にぱつとしない目つきだったが、どこか強い魅力を感じさせる人物であった。そのどちらかというと報告書に近い日記はそこで終わっていた。しかし日付から察するとアダムはアプファイルがバルキリーを奪つて逃げたあの日から三週間もたたないうちにアダムは初の実践テストを行つていた。ならば間違いないとアプファイルは思った。あの日見かけたあの部屋の中で研究員たちに囲まれて巨大なガラスチューブの中

に入っていた男はこの男だ。

アプファイルはこのファイルと研究施設が地球にあることからアダムがここにいたことを理解した。ファイルには明白にされてないが。アプファイルはしばらく基地を探検し、細かく調べた。次第に暗くなつていつたため、ためしに電力発電所がまだ作動するかどうか調べたところ、正しく動くことがわかり電気をつけた。しかもなんと、電気がつくと水も流れることがわかつた。それからしばらくアプファイルは基地を住みかとし残つてのパソコンや資料を読み上げた。彼女のモビ尔斯ーツや兵器類などに関する知識が増え、森の中で生きていたときより快適に生活できた。

第6話

紅は血の色。血が暗示しものは生贊であり、自己犠牲である。純粋な流血は無益な争いによつてもたらされ、汚された血球は正義の生贊である。紅は意味のある死を意味する色である。

数日後のことだつた。アプファイルは空から戦艦が地球に降りてくるのを見た。その戦艦には宇宙連邦軍のロゴがついていた。アプファイルは宇宙連邦軍をあまり知らなかつたが、帝国軍の敵というだけで信用する気にもならなかつた。しかもたつたの一隻で降りてくるのは明らかに不自然であつた。その上、その戦艦はファイルと手紙が置いてあつた研究所の近くに下りていた。アプファイルは事前に基地で見つけた拳銃を持ち、保護色メイクを施し、様子を見に行つた。アプファイルは彼らの結構近くまで來ていたが、戦艦から降りてきた人たちは彼女に気づかなかつた。降りてきた人たちは基本的にライフル類の武装をした兵士と見覚えのある科学者たちだつた。10数人降りた後、最後に三人の人間が戦艦から降りる。その三人は横に並んでおり、真ん中の人は手錠がかけられていた。彼の右と左にいる一人は片手にライフル、もう片手を使って彼の腕をつかんでいた。真ん中にいた人は体の至る所に包帯をしており、歩き方もどこかぎこちなかつた。

そして、アプファイルはついに、その囚人の顔を見る。長く黒い髪、

女性に近い顔立ち、そして漆黒の瞳。彼こそがアダムであった。どこか人間らしさすら欠けるような顔は見間違えようがなかつた。彼が、つかまつた状態でここに来ていることは一つの意味があつた。ひとつは帝国軍が敗北したこと、もうひとつはあの地獄の研究がまた始まるということであつた。そしてアプファイルの生きる意味があるとしたなら、それをとめることにあつた。

戦艦は降ろす人を全員降ろすとすぐに戦艦は基地にあつたランチャーパッドに取り付け宇宙に戻つた。何をそんなに急いで宇宙に戻らなければいけないのかはアプファイルには理解できなかつたが、彼女にとつては都合のいい事態だつた。そして、その戦艦が見えなくなることを機会に、アプファイルは行動に出た。

ちょうどアダムとアダムを連れている一人が通り過ぎた後だつた。アプファイルは拳銃でアダムの横にいた一人三発使つてを不意に撃ち殺した。アダムをおよそ反射的に地面に落ちた兵士からライフルを拾つた。それを構え、前に立つていた兵士に向けたころには彼らもまたアダムとアプファイルのほうに銃を向けていた。しかし、見覚えのないアプファイルの登場と、突然の事態にまだ頭が追いつけず、アダムとアプファイルのほうが一瞬早く彼ら三人を撃ち殺す。倒れ行く敵の姿は死の実感を思わせる。周りに敵がいなか確認してからアダムはアプファイルに近寄る。

「ありがとう。何者かはわからないが、助かつたよ。」

しかし、ここでアプファイルに異変があつた。彼女はなんと、涙を流していた。

「・・・大丈夫か？」

しかし、彼女は静かに顔を上げ、答える。

「・・・始めてまして。あなたは、私の弟ね」

よく見ると、拳銃を握る彼女の両手は震えていた。

そのとき、アダムは彼女の言葉を理解していなかつたし、なぜ震えているのかも理解できなかつた、だが彼は自分の恩人を安心させたかつた。

「大丈夫だ。俺は敵じゃない、だから大丈夫だ。ほら、泣くんじゃない、まだ敵はいるのだから。」

すると、彼女はゆっくり泣くのをやめた。そして震えも止まるとただアダムについていった。敵も銃声に気づき、警戒していた。アダムはすばやく死体から手錠の鍵を取り上げ、自分の手錠を外した。

「敵は残り9人ぐらいだな。おそらく外に3人、研究室に残りつて所だな。」

アダムが言つたとおり、外には三人の兵士がいた。彼らは辺りを見回すように慎重に離れないように行動していた。だが慎重さの中にも手慣れがあり、スマーズに行動していた。こっちには気づいていなかつたが、コンテナの後ろに体を隠していた。

「よし、後ろから回り込もう。ほら、ライフルをとつて。」

それを聞くとアプファイルは拳銃をポケットに戻し、したいからライフルを取つてアダムについていった。アダムとアプファイルは研究施設と向かい側にある建物の周りを回つていた。そこを回るとコンテナの左側から右側に移れるので、相手に気づかれずに銃声のしたところから離れられた。見知らぬ施設でのこの戦いは両者に影響があつたが敵は訓練された兵士、戦いが簡単に終わるはずもない。しばらくはにらみ合いのような沈黙が続いた。互いに敵の居場所も人数もよくわからない状態であつた。しかし敵に見つからぬためと、敵が物音を立てたときに居場所がわかりたいためであつた。

そしてアプファイルにはアダムが考えていることがわかつた。アダムはコンテナの後ろに回りこみ、一か八かの賭けに出るつもりだつた。しかし、アプファイルにはなぜか、彼にそんなことをさせてはならぬい気がした。アプファイルは敵にばれてしまつという危険を承知で提案した。

「私に考えがあるわ・・・」

そのころ、三人の兵士は・・・

「さつきからずつと静かだな」

「しつ！ばか、ばれるだろ！」

話し合っていたのはコンテナの内側にいた二人であった。その二人に対してもコンテナの端で周りの様子を見回していた。

「大体お前はなー」

「さっきの場所にはもういないな・・・」

様子見をしていた男が口を開く。

「え?」

もう一人の男に大して怒っていた男が割り込んで彼が言ったことに疑問を持つ

「どういうことだ?」

かれはまじめな顔をして彼に聞く

「どうやら見ていない間に移動したようだ」

「どうしてそんなことがわかるんだ?」

コンテナの端から顔だけだしていた男が、自分の体を出して隣にしやがんでいた男が見えるようにした後、アダムとアプファイルがもともといた辺りに指を指した。

「さっきまであそこに影が見えたが今はないからだ、問題は何処に行つたかだな。」

隊長格であった彼がそれを聞くと顔が青ざめた。

「・・・ここにいるのはまずいな、ほかのものと合流して研究員たちを守ろう。」

ほかの二人がそれ聞いて「了解」と答えた後ほかの人たちがいた研究施設に戻った。しかし、そこに待ち受けていたものは彼らが期待したものではなかつた。施設は彼らに見える距離にあつたが警戒して向かう距離としては結構あつた。だが彼らは施設との距離が半分ぐらいになつたとき、銃声と悲鳴を耳にする。

彼らは警戒を解き一目散に施設に向かつた。たどり着いた彼らを待つていたのは不自然に暗い部屋であつた。シャッターは下ろされ、窓からの光がなく部屋の中を見せていた光は彼がそこに入るためには開けたドアから入つていたわずかなものだつた。

「どうした?みんな大丈夫か?」

明らかに普通じゃない状況を見た三人は警戒しながらも部屋に入つていく。隊長格の兵士は自分の歩く音が水溜りを踏むときのようにぴちゃぴちゃという音を出していることに気づいた。彼はその液体がなんなかを調べるためにしゃがんだその瞬間三発のすばやい銃声の後に明かりがつき、彼はようやく状況を把握した。だが、時すでに遅し、そこにあつたのはすでに死んでいる仲間全員の姿と自分の頭に向けられるひとつ拳銃とひとつライフルだった。

「さすが、といつておくべきか。連れて来た仲間が悲鳴も上げずに死んでしまつたな。」

そういうながらついてきた一人の頭に穴が開いていることを確認する。アダムが彼に話しかける。

「おかしい、三発撃つたのに一人外したのかな。偶然か？」

兵士は立ち上がつた。

「あいにく、幸運だけがとりえでね。いや、不運かな。前もつて言つとくが、拷問するつもりなら無駄だぜ、俺は詳しいことは知らない。お前が変な気を起こさないようしろといわれただけだからな。」「本当にそう思うのならば、銃を捨ててくれるかしら。」

今まで黙つていたアプファイルが口を開く。

「ああ、もちろん」

そういうと彼はライフルを始め、ハンドガンやナイフ、グレネードまでもを取り出し投げ始めた。武器をすべて捨てた後両手を空に挙げ、抵抗する気がないことをはつきりさせた。しかしその態度には恐怖や不安といったものが一切なかつたように見えた。その態度が信用できなかつたアダムは自分についていた手錠を取り出し彼につけた、彼の態度が変わつたわけではないが。

「俺は捕虜つてわけか？」

アダムはまだこれからどうするかを考えていたが質問が簡単に彼の考えをとめてしまった。

「わからない、だが今は着けておく」

その質問に答えた後、この男をどうするかを考えた。だがアプファイル

ルはすでに答えを持っていた。

「この人に手錠をかける必要はないわ。」

アダムはこれをまったく理解できなかつた。

「・・・どうしたことだ？」

「さあ、うまく説明できないわ。でもこの人の態度は自信から来るものではないわ。なんとなくだけど、彼は私たちに対して敵意があるとは思えない。」

アプファイル自身、自分でなぜそう思つたのかはわからなかつた。

「本気なのか？」

「彼はただの兵士よ、上からの命令で動いてるに過ぎない。彼がその気なら、仲間にだつてなりうると思うわ。」

「そうは言つてもな。信用できるものか」

そのまましばらくなつて一人はその男を見つめた。男は思わず息を呑んだが彼は自分に戦意は無いという事を伝えようとした。

「命をとらないんなら、何でも言つこと聞くぜ。」

「勘違いしないで、あなたを脅そうとしているのではないの」

「さて、アプファイル。甘い、甘すぎる。連邦軍が俺をほしがつての限りは信用できる人間などいない。仮に今言つことを聞いても、いつ裏切るかななんてわからないぞ。」

「だから、信用できるとかできないとか私はそういうことを言つてるのでないの、無駄に彼を殺す必要は無いと言つてはいるだけ。実際彼は武器を捨てたわ、このまま見逃して何の害があるというの？それに外の森は危険がいっぱいよ、私たちはともかくとしても、彼一人だつたら私たちについてこない限りあまり長く持つとは思えないわ。脅して奴隸にする必要などどこにも無いの。」

「だからこそだアプファイル、こいつに自由を与えたならそれこそをしでかすかわからないんだ。」

「それは違うわ、彼は私たちを殺したりでもしたらこの星で生き残れないわ。私たちを殺すことは自殺行為なの。だから信用できるとか、できないとかの問題ではないのよ。彼の立場になつてみて、次

にいつ仲間が来るかもわからないこの星に彼は自ら自分を孤立させるようなことをするかしら?」

「・・・」

アダムは不満そうにアプファイルを見つめるが、妙に説得力のある彼女に意見に賛成することにした。

「お前にあるのはどうやら幸運のようだな。せめて名前を聞こうか。」

ルークは彼に突きつけている銃をそのままにした常態で手錠を外し始めた。

「セスだ。よろしくな。」

手錠を外した後も彼は決して変な行動を取らなかつた。

「ところで、勘違いしてるようだから言つとくが、次に仲間がいつ戻つてくるかぐらいかはわかつてゐる。おそらく一ヶ月もしないうちにこのことを何も知らない人たちがこの星に住むために移住し始める。これは極秘のオペレーションだったからな、詳細を知つてゐるものは少ないし、上の方は公にするつもりは無いだろう。ここにい人が住み始めたら、彼らにまぎれていればとりあえず怪しまれることは無いだろ。」

このときアプファイルとアダムはお互に驚いた顔で見合つた。

「その考えには賛成だわ。あなたたちは一ヶ月間は持つ様に食べ物とかもちゃんと持つてきたのでしょうか?この基地で彼らが来るまで待ちましょう。」

しかし、アダムはやはりどこか不満そうだった。

「・・・そうだな。」

そしてこの時点から三人はしばらくともに運命を歩むこととなつた。戦争が終わつたばかりの世にまた新しい争いの種の存在を知りなが

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1395d/>

Gundam Divine 外伝

2010年10月9日05時43分発行